

## 「総合看護学」導入の試み - 専門基盤教育と看護専門教育の融合と自律性を 目指して -

The challenge of introducing an "Integrated Nursing Study": Aiming at organic integration of basic education and technical education of nursing and at students' autonomous learning

伊東 朋子, Tomoko Ito

大分県立看護科学大学 基礎看護科学講座 基礎看護学 Oita University of Nursing and Health Sciences

藤内 美保, Miho Tonai

大分県立看護科学大学 基礎看護科学講座 看護アセスメント学 Oita University of Nursing and Health Sciences

2004年1月10日投稿, 2004年5月28日受理

### 要旨

大分県立看護科学大学では4年次生を対象に「総合看護学」を導入し、人間科学関連の科目を中心とした専門基盤教育と看護専門教育との有機的な融合を図るとともに、看護実践能力の向上もめざした取り組みを行った。科目目標は、医療・保健現場において遭遇しやすい状況・場面について、より専門的な知識に基づき適切なアセスメント、看護ケアを提供できる能力を養うことである。履修時期は、4年次後期とし、就職、国家試験を目前にしているため、自律的な学習ができ、総合的な判断力を身につける最も効率的な時期として設定した。グループワークによる学習形態とし、課題事例に対して演習およびロールプレイを実施した。医療・保健現場で遭遇しやすく専門性の高い事例を展開することで、実践現場を想起した学習ができたと感じており、また事例に対する学びだけではなく、物事を深く追求していく姿勢、根拠に基づいた対応姿勢などの重要性を認識できたと感じている。

### Abstract

This paper describes the introduction of an "Integrated Nursing Study" course in Oita University of Nursing and Health Sciences. This course aims at integrating organically basic education and technical education of nursing. It is also intended that the skills required for nursing practice will be improved. The goal of this subject is to master the nursing skills necessary to provide appropriate assessment and proper nursing care, according to more theoretical, technical and practical knowledge, in the ordinary situations of medical and public health services, which nurses are likely to encounter. The course is set in the second semester of the senior-year curriculum. This period seems the most effective for fourth year students to take the course because they can make integrated judgments about nursing care after studying for over three years at the university. It is also expected that the nursing students can concentrate on the subject autonomously before the busy period of obtaining employment and of preparation for the national examination for a nursing license. The course is conducted in group work. Practices and roll-playing activities are made based on case studies of medical/nursing services. It is assumed that the course takers have had pseudo-clinical experiences by performing the highly specialized tasks which are close to real situations in medical/nursing places. It is also believed that the students have not only acquired knowledge of practical cases of medical/nursing services, but also realized the importance of the nursing attitudes required to pursue things profoundly on the basis of clinical evidence.

### キーワード

総合看護学、自律性、アセスメント、グループワーク、ロールプレイ

### Key words

Integrated Nursing Study, autonomy, assessment, group work, role play

## 1. はじめに

総合的な判断力を育成し、自律した看護職の育成をめざすためには、4年間の大学教育で受けた一般教養を含む基礎的な教育と看護の専門的な教育とを自らが統合できる能力を養うことが不可欠である。一方では、大学における基礎看護教育で育成される看護実践能力と医療現場から求められる看護実践能力との間の乖離が指摘され、看護技術を含めた看護の基礎教育強化が求められている。そこで本学では平成15年度から4年次生を対象に後期の科目のひとつとして「総合看護学」を導入し、人間科学関連の科目を中心とした専門基盤教育と看護の専門教育との有機的な融合を図るとともに、看護実践能力の向上もめざした取り組みを行った。4年次後期は、卒業研究、就職、国家試験の準備など学生の緊張度が高まっている時期であり、学習に対するモチベーションは最高潮となっており、学習のレディネスは十分な時期である。「総合看護学」を通じて、これまで学習してきた生体構造学、生体機能学、生体反応学、人間関係学などの専門基盤教育と専門の看護学の有機的な統合を学生自らができると考えている。

## 2. 総合看護学の進め方

本学では、看護実践能力向上をめざして、3年次生から4年次生にかけての特に看護基本技術のレベルアップの取り組みを図1に示すように3段階に分けて行っており、「総合看護学」はこの第2段階のプログラムである。第1段階では最低限習得すべき看護基本技術を、看護系教員全員が協力して技術チェックリストに基づき、チェックする。第2段階では今回紹介する「総合看護学」プログラムを展開する。第3段階は、卒業直前に行うもので、確実な無菌操作の習得、採血や筋肉内注射、静脈内注射などの各種注射に関する技術、救急処置技術などの看護技術の強化を目指している。4年次生は、就職を前にし、専門的で高度な看護技術に対して不安をもっている時期でもある。近年、実習現場である医療の場では、診療技術が高度で複雑になるにしたがい、実習の際に看護学生が実際に手を下して実践する機会が減少している。そのため、見学のみに終わることも少なくない。実習時間が限られている大学教育の中では、実習ローテーションの組み方によっては、専門的技術を見学する機会すらない学生もいる。「総合看護学」では、知識の学習のみならず、より専門的な看護実践を提供できることにも目標をおいている。この時期こそ、学生のモチベーションが高

く総合的な判断力を身につける最も効率的な履修時期であると考え、短期集中型カリキュラムで実施することにした。総合看護学の単位数は1単位で、表1に示すように、4年次後期前半の10月～11月にかけて実施した。基礎看護科学講座、専門看護学講座、広域看護学講座の教員が関わったが、学生自身が計画的な学習が主体的に行えるよう教員はできるだけ介入せず、学生より質問や相談のあった時のみに、指導助言を与えることとした。グループワークを原則とし、1グループ6～7名として全体で12グループの編成とした。各グループに教員を1人、配置するというようなことはせずに、主として関わった2名の教員も出席確認以外には、グループへの介入は極力、行わなかった。卒業研究に忙しい中でグループワークが持ちやすいように卒業研究の配置研究室を考慮して、グループ編成を行った。同一の事例に対して2グループが検討を行い、発表会の場でお互いのグループの検討結果が比較できるようにした。グループワークを通して、学生相互のコミュニケーションを図り、看護学の知識・技術を自ら整理統合する機会となり、実践能力のレベルアップにつながると考えている。総合看護学の学習目標は、医療・保健現場において遭遇しやすい状況・場面について、より専門的な知識に基づいて適切にアセスメントでき、適切な看護を提供できる能力を養うことである。そこで国家試験の準備期間中でもあることも考え、国家試験の状況設定と類似する場面・事例を提示して学生がより興味を持って自律的な学習ができるように配慮した。成人・老人看護領域、地域看護領域、母性看護領域、小児看護領域から、医療や保健現場で遭遇しやすい16事例を各専門領域の教員に作成してもらい学生に提示した。各事例に対する課題は、

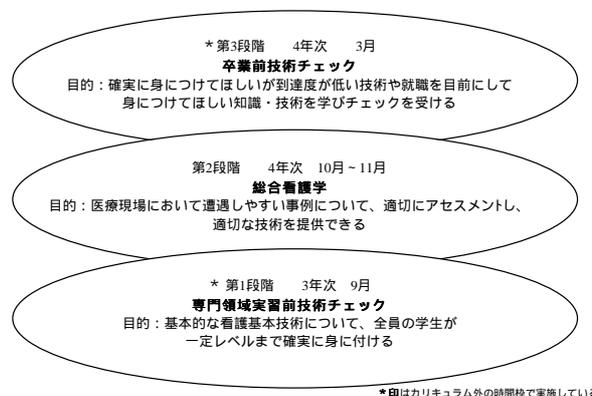


図1 本学における看護基本技術教育プログラム

表1 総合看護学スケジュール

月 日	1限・2限	場所
10月6日	オリエンテーション/演習	各演習室
10月13日	休日	
10月20日	演習	各演習室
10月27日	演習	各演習室
11月3日	休日	
11月10日	演習	演習室/実習室
11月17日	発表	実習室

\*2003年度は休日が2回入ってしまったが、カリキュラム上の時間以外に学生が主体的に演習を行った。

### ロールプレイ発表会スケジュール

		発表：20分	質疑応答：20分
事例1 (母性)	Aグループ	9:00~9:20	9:40~10:00
	Bグループ	9:20~9:40	
事例2 (小児)	Cグループ	10:00~10:20	10:40~11:00
	Dグループ	10:20~10:40	
事例3 (在宅)	Eグループ	11:00~11:20	11:40~12:00
	Fグループ	11:20~11:40	
	講評	12:00~12:10	
事例4 (成人肺癌)	Gグループ	13:00~13:20	13:40~14:00
	Hグループ	13:20~13:40	
事例5 (成人胸痛)	Iグループ	14:00~14:20	16:40~17:00
	Jグループ	16:20~16:40	
事例6 (パーキンソン)	Kグループ	17:00~17:20	17:40~18:00
	Lグループ	17:20~17:40	
	全体講評	18:00~18:10	

\*IグループとJグループとの間に総合人間学の講義が入り、2時間空いている。

事例の看護に関する専門的知識を整理し、看護過程を展開するというものであった。表2に1つの事例を示す。胸痛発作を起こした救急場面の事例であり、具体的な課題として入院時の観察とそのアセスメント、救急処置技術とその根拠、および使用薬剤と類似薬剤の違い、心電図の分析などが提示されている。発表の際にロールプレイを行う看護技術は緊急入院時の観察と血管確保および側管からのモルヒネの静脈注射、心電図モニター、酸素吸入、留置カテーテル挿入等であった。これらの看護技術について、ケアの順序性、的確さ、時間的配慮、緊急時の患者および家族への心理的側面からの援助などの技術が発表の際にできることを期待した。発表までの演習と技術練習なども含めた時間配分は学生達が考え、グループごとに計画を立てて実施することとし、学生の主体的な学習を尊重した。オリエンテーションでも、学生が主体性をもって学習することが重要であることを強調した。演習では、学生どうしが活発に検討しあえるように1グループ1演習室が使えるように場所の配慮もした。実際の演習場面では、学生どうしが気軽に意見を出し合い、また役割分担した課題について質問したり、教え合う場面が

みられ、知識不足を反省しながら前向きに取り組んでいた。看護技術の練習は実習室を利用し、課外の時間も利用し、何度も繰り返し練習する姿がみられた。最終日の発表は各グループ20分として、学内実習室で行った。課題ごとに質疑応答の時間をもうけ、また教員からの指導コメントをもらうようにした。発表の際には提示した課題についてA3用紙1枚程度のレジюмеプリントを作成させた。またすべての事例に対する検討結果(レジюме)を全学生が事前に熟読できるよう学生及び教員に発表の4日前に冊子にして配布した。またロールプレイを交えて行う発表の場では患者、看護師、医師、家族などの役割や人数もすべて学生が設定し、臨場感のある発表が行われるように指示した。提供する看護技術や優先する看護技術の適切さ、効率性などを比較することができるよう同一事例について2グループが連続して発表した。その後20分の質疑応答を行い、学生の主体的な質問ができるように配慮した。発表風景を図2~図5に示す。発表会には看護系教員だけでなく専門基盤領域の教育を担当している人間科学講座の教員にも参加してもらった。教員からの具体的なコメントによって、学びの再確認と

表2 総合看護学の課題事例(成人・老人看護系)

あなたは、循環器病棟に勤務する新卒の看護師です。午後7時、3人で夜勤をしているところに、狭心症の既往のある57歳の男性が、激しい胸痛を訴え救急車で運ばれて来ました。救急処置は直接病棟で行うことになりました。ニトログリセリンも効かなかったという情報が入っています。妻が心配そうに付き添っています。

血管確保、酸素吸入、心電図モニター装着、尿留置カテーテルの準備をするように先輩看護師から言われました。

看護ケアおよび入院時の身体所見の観察を行うとともに上記の準備をし、これらの処置の理由、根拠について考えなさい。また側管から塩酸モルヒネ(1A=10 mg)を20 ml 5%グルコースで希釈し、静注しなさい。

また、下図のような心電図波形があらわれました。この心電図の波形について考察しなさい。

緊急的な処置の後、緊急冠動脈造影検査を行い、左前下行枝近位部に99%狭窄を認め、TIMI分類1度と判断され、同部位に経皮的冠動脈形成術およびステント留置術を施行して残存狭窄率4%まで開大できました。開大直後に胸痛は消失しました。以降、ヘパリン、ACE阻害薬、ニトロールが投与されました。

これらの治療薬について、患者および家族にわかりやすく説明しなさい。またアスピリン、ワーファリンおよび遮断剤、Ca拮抗薬との関連を考察しなさい。

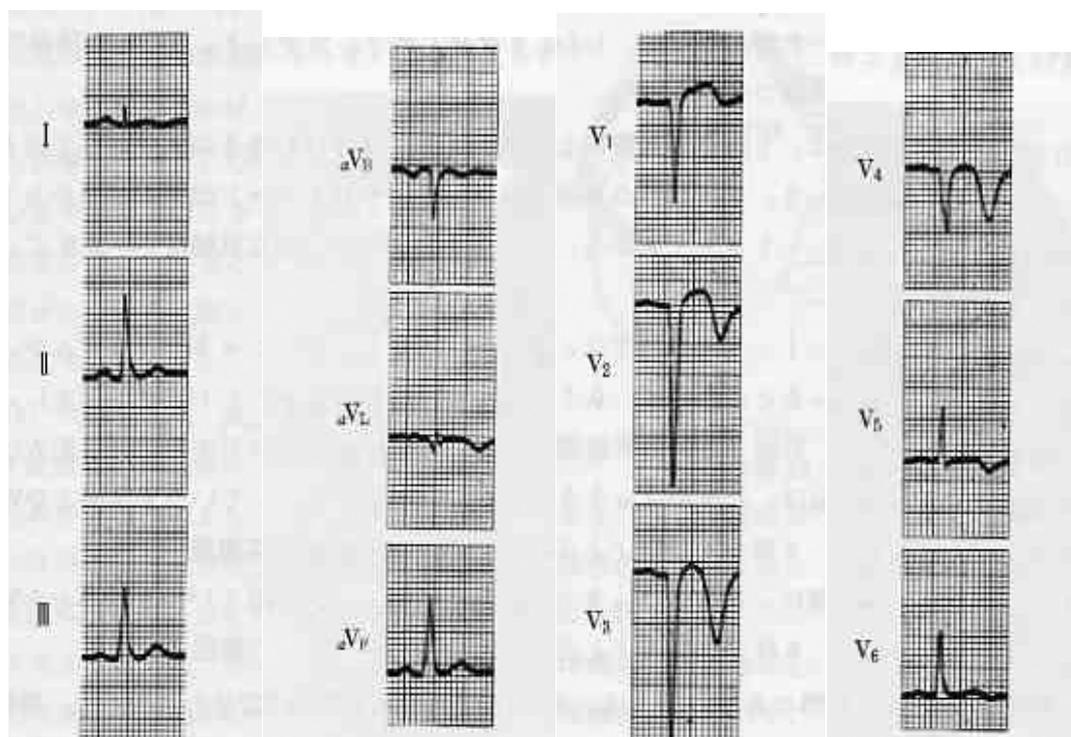




図2 肺ガン術後事例の発表風景



図3 排痰促進援助の発表風景



図4 胸痛発作時の救急場面の発表風景

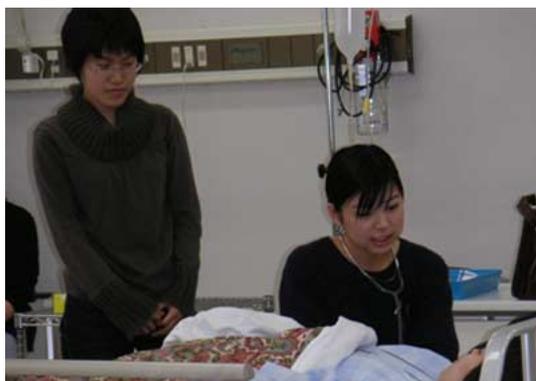


図5 訪問看護事例の発表風景

新たな発見もあった。また学生どうしの質疑応答を促進するようにしたことで、学生どうしの議論が活発になり、それぞれの事例について担当しなかった領域についても共有できる発表会となった。評価方法は出席状況や学習の参加度、発表内容、レジュメプリントの内容などを加味して総合的に評価した。

### 3. 総合看護学に対する教員の評価

4年次生にとっては、就職や進学、国家試験、卒業研究など複数の課題が凝縮する1年間である。実際に「総合看護学」を担当した教員としては、提示された事例に対する学びだけではなく、物事を深く追求していく姿勢、根拠に基づいた対応姿勢などを持つことの重要性を学生が気づくことができ、また、4年次の後期という時期だからこそ、効果があったのではないかという感想を持っている。しかし、卒業研究に全力投球させたいと思う時期に学生が「総合看護学」での発表会の準備に追われ、卒業研究への力の不均衡配分と学生への過重負担を懸念する教員もいた。一方、学生の潜在力は計り知れないものがあり、複数の課題に対処する備蓄力は持っており、学生の持てる力を引き出すことが教員の役目でもあるとする意見も聞かれた。人間科学講座の教員からは事例を展開したことやロールプレイにより、実践現場を想起することができたという意見が目立った。就職先もほぼ決定している4年次の段階で、現実的な場面をイメージしながら学習することが可能で、「総合看護学」を通じてプロとしての自覚が芽生えはじめたと評価している教員もいる。3年次生と比較しても単なる1年間の相違という以上に4年次生の成長の度合いを評価する教員もいた。また発表は、1日で12グループの発表と質疑応答を行ったために、十分な議論ができない事例もあったとの批判もあった。今回の発表では、各専門領域の教員の参加があったので、学生の学びも深まり、理解もしやすいという意見も得られたが、時間的制約のため細かいことの指摘ができなかった事例もあったとする意見も聞かれた。実習事例による検討で国家試験の状況設定問題に類似する形式としたことも、学生の学習意欲を高められた一要因であったとする意見があり、今後さらに提示事例を適正化するための検討を重ねていく必要があるという意見が多かった。大多数の教員は大学は自分自身で学習し、その方法を身につけるところであり、このようなグループワークという学習形態を通じて、最終的には学生の自律性を高めることに役立ち、「総合看護学」はこれまでの知識を統合して

表3 総合看護学終了後の学生の意見(一部抜粋)

#### グループワークについて

- ・ 病態や薬物のことなども調べる良い機会となった。
- ・ 技術の根拠や病態のメカニズムなど、深く調べ、あやふやだった知識が確かなものになった。
- ・ 国家試験の模試の問題に似た事例が出て、以前ならわからなかったことがよく理解できた。
- ・ 7月に行った看護技術チェックは基本的なものばかりであったが、今回は専門的なことが増えて復習の面でとても良かった。
- ・ 事例でいろいろな分野が総合されていたので、いろいろな点から見直しができ根拠を考えることができ学びが深まった。
- ・ 事例にそって調べていくことは楽しく覚えやすかった。
- ・ ロールプレイで行うことで援助方法や患者の症状など具体的にわかって良かった。しかしそれまでの準備は本当に大変だった。
- ・ 事例の難易度にばらつきがあった。難しい事例の急性期などは勉強になった。
- ・ 人間科学系の科目との関連はわからない事例があった。
- ・ 今回はグループで学習したが、7月の技術チェックは個人でやったのでよかった。

#### ロールプレイ・技術について

- ・ 自分がよくわかっていない部分が見えて、改めて技術の練習をしなければならぬことを自覚し実際にロールプレイで技術をおこなったことは良かった。
- ・ 事例で技術を実施し、技術と技術の流れや根拠が理解できた。
- ・ ロールプレイで現場イメージができやすく、先生から指摘をうけることで講義や模試のやり直しよりも、すんなりと頭に入っていた良かった。
- ・ 実際に就職して遭遇しやすいということなので、学ばなければならない技術を知ることができた。
- ・ 医療機器の使い方などわかって良かった。
- ・ もっと技術的にどこが悪かったのか、また一連の技術の見本を見せてもらいたかった。
- ・ みんなにみられて緊張したが、実際現場では一人で責任をもって行うこともあって、この場で間違っていたと思う。
- ・ 客観的に他のグループをみると、自分が実際にやってみて技術の未熟さを実感できた。
- ・ 1つ1つの技術についてはもっと勉強して正確に行えるようにしておけばよかった。講義で習っていなかったり実習の場面をみているロールプレイの場面を、正しいと思ってしまいそう。
- ・ グループ発表のあとの討論は視野が広がり先生方のアドバイスも参考になった。
- ・ 先生たちの教科書にのっていない技術の細かいアドバイスで理解できた。

#### 発表方法について

- ・ 1つの事例を2グループで比較してできたので、互いに学びができた。
- ・ グループ内でよく話し合い、全員が納得して臨んだ発表だったが、もう1つのグループと比較するとまだまだ落とし穴があることがわかった。
- ・ 質疑などの時間が短かったので、十分に討論できなかった。
- ・ 発表が20分と制約があったので細かい技術まで行えなかった。自分の事例以外はあまり読み込んでなくて理解できないものもあった。
- ・ 発表は2日間に分けてほしかった。休憩なしだったので、きつかった。
- ・ 20分間の発表で、A3サイズ1枚に要領よく分かりやすくまとめることも勉強になった。

#### 時期について

- ・ この時期にすることでさらに学びがあった。しかし就職試験などでグループメンバーが集まらないこともあり負担が集中した学生もいた。
- ・ 先生のアドバイスは今だからすごく納得して理解しなおせたと思う。

いく学習として取り組むことができた」と評価している。

#### 4. 総合看護学に対する学生の感想

学生の感想と今後の改善点についてアンケートを行った。その中から主な意見を一部抜粋したものを表3に示す。学生の全体的な反応は、取り組みは大変ではあったがこれまでに学んだことを深く掘り下げることができた」と前向きに捉えている学生が多かった。グループワークによる学習を通して、一つの事例に対して解剖生理学や病態、薬理学など総合的に考えることができ、理解が深められたという意見が目立つ一方で、事例によっては専門基盤科目との関連がわかりにくいという意見や質問時間が少なかったという意見もあった。確かに質疑応答については時間的制約もあり、学生全員に理解ができたかどうかは疑問の残るところとなった。専門的な知識や技術課題の設定では、グループ学習によってさまざまな視点から議論され学びにつながるという意見が多かったため、今後、課題事例のさらなる精選が必要であると考えられる。また、数ヶ月後に卒業を控えた学生にとっては、現場のイメージ化ができたことの意義も大きかったようである。またその技術の根拠となる資料も作成したことで、他のグループが、その場では質問できなかつたり理解ができなかった場合でも、資料をもとに考えていくことが可能となったと学生は感じている。1事例を2グループが担当したので、学びが共有されやすかったことや2グループが異なった展開になっても、行った技術の判断や根拠を明確にすることで、他グループとの違いや実践した技術の適切さの判断について学んだという感想を持った学生が多かった。

#### 5. おわりに

自然科学の科目を中心とした専門基盤教育と看護の専門教育との有機的な融合を図る科目を設けることにより、看護実践能力を向上させる可能性のあることがわかった。具体的にはロールプレイやグループワークという学習形態を通じて「総合看護学」という新たな科目を設置することで、臨地実習では十分学びきれなかった内容や不足した項目を補わせることができる。必ずしも臨地現場に行かなくても提示された模擬事例を通して大学の4年間で学んだ知識・技術を総合的に捉えさせることが可能であることが分かった。より臨場感のある看護過程の展開ができるためにはどのような事例を提示するかがきわめて重要であり、今

後、提示事例の検討や発表方法、発表時間の検討も行い、事例担当グループ以外の学生にもその事例を十分共有させることが可能で、理解が深まる授業展開方法の工夫と、教材の精選を行う必要がある。そして教育現場と社会現場とで求める看護実践能力の乖離を少しでも埋めることができる看護教育として改善していきたい。

---

#### 著者連絡先

〒 870-1201  
大分県野津原町廻栖野 2944-9  
大分県立看護科学大学 基礎看護学研究室  
伊東 朋子  
ito@oita-nhs.ac.jp